

ジュート -- 底を打った斜陽産業（特集 気がつけばバングラデシュ -- 芽吹く新産業）

著者	坪田 建明
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	231
ページ	4-5
発行年	2014-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003317

【第一部 豊富な自然・人的資源の活用】

ジュート
—底を打った斜陽産業—

坪田 建明

ジュートという作物をご存じだろうか。日本人に最もなじみのあるものとしては、麻袋に使われている植物である。コーヒー豆や土

嚢として使われている。バングラデシュのジュート生産量は世界第二位であり、輸出量は世界第一位であり、世界市場においてもバングラデシュのジュート産業は重要な地位を確保し続けている(図1)。

バングラデシュのジュート産業の発展の経緯を歴史的に概観して、くるなかであげることのできるキーワードは、植民地期の商品作物としての普及、印パ分離独立ともなう変化、バングラデシュ独立にもなう変化と国営化・民営化・環境志向であった。筆者はバングラデシュに対する先入観がほとんどない状態からこの研究に取り組むこととなり、大いに興味をそそられた。なぜなら、ここに挙げたキーワードはそれぞれ経済学が近年精力的に取り組んできた研究テーマであったからだ。

●植民地期のジュート産業

ジュートが素材として着目されたのは、クリミア戦争が勃発したためイギリスがロシアからリネン(苧)を輸入できなくなり、代替原料を探し求めたのがきっかけで

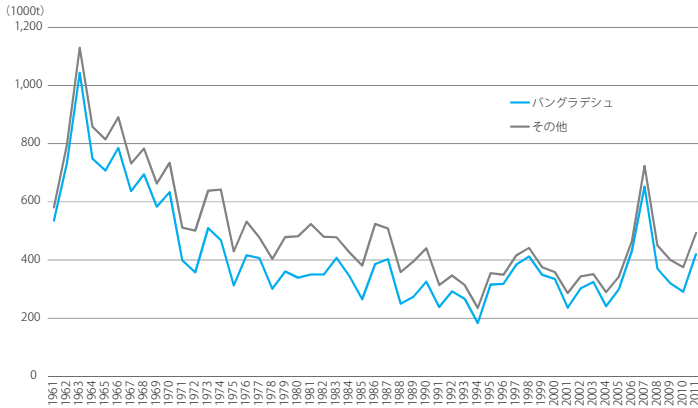
●ジュートとは、そしてその加工行程

ジュートの栽培は種まきから始まる。その時期は二月末から四月末にかけて行のが一般的である。ジュートが収穫期を迎えるまでにおよそ四カ月程度を要する。収穫後にいったん乾燥させ、その後浸水発酵によって繊維の状態にする。これを乾燥させたものが原材料である原ジュート(raw jute)と呼ばれるものである。ジュート産業と呼ぶ場合、この原ジュートを糸にする工場と、その糸からジュート布または袋を作成する工場を指す。

●印・パ分離独立の影響

一九四七年の印・パ分離独立は、それまでの生産製造体制を大きく変化させることとなる。東ベンガル(東パキスタン・現バングラデシュ)には製造工場がなく、西ベンガルではジュート供給が不足するようになった。これに対応する形で、東ベンガルでは西パキスタン資本による工場建設が進むと

図1 ジュートの輸出量



(出所) FAOSTAT (<http://faostat.fao.org/>) より筆者作成。

時に、西ベンガルではジュート栽培が盛んに行われるようになっていった。分離独立とジュート生産に関する研究としては参考文献①が挙げられる。ただし、彼らの分析対象は西ベンガルに限定されている。

● バングラデシュ独立と国有化

バングラデシュの独立により、今度は資本家であった西パキスタン人が退去することとなる。放棄された資本およびベンガル人が所有する工場も含めて、すべての工場は国有化されることとなった。国有化された工場は Bangladesh Jute Mill Corporation (BJMC) のもとで管理運営されることとなった。時を同じくして石油を用いた包装技術が向上したため、ジュートに対する世界需要が急速に落ち込み、その経営は芳しくなかった。

● 民営化という社会実験

一九八二年から八三年にかけて、国営化以前にベンガル人が所有していた資本については本来の所有者に返還されることとなった。一九八二年時点でジュート工場は六二存在しており、そのうち三三工場の民営化が検討されたのだが、

最終的に民営化されたのは三一工場であった。一九九〇年代に入り、残った国営企業についても世界銀行の指導のもと、順次民営化が進んでいる。参考文献②は、このジュート産業における民営化を社会実験としてとらえ、民営化された企業と国営企業の雇用と生産量の関係を分析している。余剰労働者が事務系に多く存在していた可能性を示しており、民営化によって単純労働への代替が生じた結論づけている。また、参考文献③はこのデータを一九九四年まで延長した分析を行った結果、一九八八年までとは異なり、その後は国営企業の経営・事務系における余剰労働が減少したことを示した。

● 南アジアの需要増と天然繊維

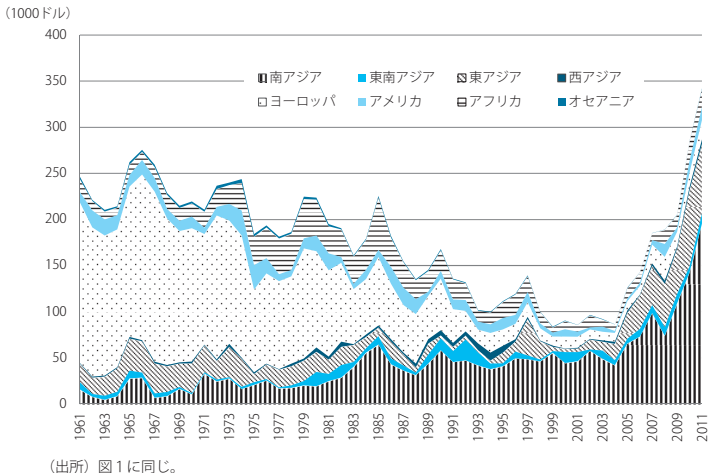
図2は時系列の輸入額を示したものである。図1と比較すると、貿易量よりも貿易額の減少の方が緩やかであることがわかる。これは、単位あたり価格の上昇があったからで、単位価格が伸び悩み、その後減少したために一九八〇年代から

貿易額が減少に転じた。変化が生じたのは二〇〇四年以降である。これは主にパキスタンとインドなどの南インドが需要を増やしているほか、天然繊維としての需要も徐々に増えていることに由来している。また、今後も増加するとみられる需要に対して生産が追いついていないため、単位価格に顕著な増加がみられているのも二〇〇四年以降の特徴である。

● おわりに

ここでは触れなかったが、バングラデシュ国内における強制ジュート包装法の施行により、国内需

図2 地域別のジュート輸入額



(出所) 図1に同じ。

要の増加が見込まれており、今後南アジアを中心とした需要増と世界的にゆるやかな需要増が見込まれることから、ジュートは再び輸出産業としての地位を向上させているといえる。

(つばた けんめい/アジア経済研究所 在ロンドン海外派遣員)

《参考文献》

- ① Bharadwaj, Prashant, and James Fenske. "Partition, Migration, and Jute Cultivation in India." *Journal of Development Studies*. 48(8): 2011. pp.1084-1107.
- ② Bhaskar, V., and Mushtaq Khan. "Privatization and Employment: A Study of the Jute Industry in Bangladesh." *The American Economic Review*. 85(1): March 1995. pp.267-273.
- ③ Bhaskar, V., BishnuPriya Gupta, and Mushtaq Khan. "Partial privatization and yardstick competition: Evidence from employment dynamics in Bangladesh." *Economics of Transition*. 14(3): 2006. pp.459-477.